慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	私と国際経済学 : 最終講義(白石孝教授退任記念号)
Sub Title	My Forty Years as a Professor of International Economics at keio University (In Honour of Professor Takashi Shiraishi)
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	1987
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.30, No.1 (1987. 4) ,p.1- 17
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19870425-04054185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
30 巻 1 号
1987 年 4 月

私と国際経済学

——最終講義——

白石　孝

ただいま商学部長から過分な御紹介を頂きまして，私としては大変光栄であるとともに，いよいよ慶応義塾を去るに伴いまして皆様方に，「私と国際経済学」ということで，慶応義塾40年の私の在職期間を顧みながらお話し申し上げたいと思います。

お手元に「私と国際経済学」というレジメを差し上げてございまして，私の著書やその他ここで触れますものにつきましてはメモ程度に記してありますので御覧下さい。

一

最初に，「人の生涯というのはしばしば人の出会いによって決まる」ということを私の40年の在職期間の経験から申し上げることができると思います。これは私だけではなくみんなそうではないかと思います。

と申しますのは，私自身を顧みますと，国際経済学を専攻し，現在のような職につきましたのは，ひとえに私が三田で亡き岩田仭（たかし）先生の講義を聞いて，その研究会に学んだということによるわけでございます。もしも，私が慶応義塾に来なかったら，また慶応義塾に来ても岩田先生に巡り合わなかったならば，私は国際経済学を研究しなかっただろうし，また，今日のような道を歩まなかったんではないかと思うのです。

顧みまして昭和16年という頃，もちろん戦前でございます。この中には多分この時代を御承知の方は非常に少ないかと思いますが，その頃はまだ今日の国際経済学という名前は存在いたしておりません。貿易論というふうに当時は呼んでいたかと思いますけれども，しかしながら，それも商業通論の一つでありまして，正式な名称ではなかったわけでございます。

例えば慶応義塾の経済学部の科目をみましても，昭和13年には貿易論というものは設置されておりません。昭和16年になりましてから商業政策という大きな科目の中に特殊講義というのがありま

して，そこに貿易論というのがポツンと入っていたわけであります。いまとは全く趣を異にいたします。私が慶応義塾に残り商学部にまいりましてから，貿易論という名称を国際経済学に直し，すでに現在なされているような科目になっているわけでございまして，それまでは全く貿易論しかございません。それもわずかにポツンと置かれた特殊講義でございます。ところがその特殊講義を担当したのが岩田仞助教授でございます。当時31歳であったかと思います。31歳の若き助教授の岩田先生が，貿易論は商業論ではない。つまり単なる対外商業取引の研究ではないんだということから，経済理論の中で貿易論を位置付けようと努力をされたのであります。これは当時としては大変なビジョンであったし，実際に先生はそれを掲げて貿易論という特殊講義を持たしてもらったんではないかと思います。

昭和15年に岩田先生の書かれました『国際貿易論序説』という本が巌松堂から出ました。これはどういう内容かと申しますと，全く従来のような商学的な貿易論の扱いではなくて，経済学史の中で貿易論というのがどういうふうに確立していったか，その過程を描いたものでございます。このようなときに私は初めて先生の講義を聞くことになります。

最初の講義の時間のことです。壇上に立った岩田先生は開口一番次のようにいわれました。「貿易論に三つの学派がある。第一は古典学派，第二は新古典学派，第三は近代理論である」と。私はそれを聞いて，まさに私の将来は決定いたしました。この「三つある」という非常に論理的な切れ味と，明快な話に私は魅せられたと言っていいと思います。先生は33歳で亡くなってしまいますけれども，この新進助教授の論理の明解な講義というものが私を引きつけました。

余談ではございますが，それ以後私は，すべて「三つ」ということのくせが付きまして，現在またそうでございます。必ず何かあると三つある。第1は，第2は，第3はというふうに言っておりました。これは私のゼミの卒業生は御記憶と思います。就職する場合でも，希望の理由は三つある。必ず三つを挙げよというふうにしてまいりました。私自身のすべては三つに帰せられるというふうにいつも思っておりました。これがくせになりました。

この脳裏に焼きついた講義から私は大変多くのものを学びましたが，講義というものの醍醐味はやっぱり三つあるんじゃないかと思います。

第一は講義のめりはりであります。どんないい講義でもめりはりがなければ，われわれを引きつけるものがない。

第二は，論理的な展開があるということであります。論理的にピチッと組み立てた講義でなければならない。

第三は，その講師の学問的な熱情というものが吐露されていなければならない。

この三つというものが講義の醍醐味ではないかと思います。このことは私の生涯を通じて実行し，また努めてまいりました。。

私はこうして先生に引きつけられましたけれども，講義の内容というのは大変難しゅうございました。とにかく日吉から三田に参りまして，経済学部の「け」の字もわからないわれわれに，古典学派の価値論の展開は大変難解でございました。しかし，多くの人達は難しければ難しいほど何か理解しようという努力をいたしました。最近の学生諸君の傾向がややそれに欠けていることを痛感するわけであります。難しいことから逃げようという風潮があるやにみうけられます。しかしながら当時は難しければ難しいだけやってみたいと思った時代でございました。

そして岩田先生の論理というのは，古典学派というものは労働価値説から成り立っている。その労働価値説の上に比較生産費という国際分業論が成り立っている。ところがもしも労働価値説というものがとられてしまえば比較生産費原理は果たして存続できるだろうか。こういうものが当時の問題点でありました。

学説的に申しますと，御承知のように限界革命があって，労働価値説は放棄されてまいります。しかしそのあと，どんなふうに貿易論というものが理論付けられるだろうかというのが当時の主題でありまして，岩田先生はその点を追ってまいりました。そして近代価格理論へどうやって進んでいったかという位置づけを論理的に展開したのであります。

しかしながら一方で，残念ながら古典学派のビジョンというものは精密化すればするほど，近代化すればするほどビジョンが失われました。われわれはこの点をよく学ばなきゃいけないと思います。理論の精密化は必要である。しかし精密化するがあまりに初期のビジョンというものが失われるということを，学問の中でも教えられたと思います。そういう意味でも近代理論に至りまして，古典学派の壮大なビジョンというものは失われてまいりました。これを岩田先生は得々と説かれました。そして，理論は発展した。貿易論は貿易論として確立していった。けれども古典学派の資本主義初期のあのビジョンというものが失われていったんだということを講義で最後に結ばれました。これは私にとって大変な魅力でございました。どんなに胸を膨らませてこの講義を聞いたかわかりません。それが契機になりまして，昭和16年春，岩田研究会に入りました。研究会としては第3期生だと思います。しかしその頃に，先生は近代理論の欠点というものから，何か脱皮したいという努力を続けられました。

それはなぜかと申しますと，国際価格論には一つのビジョンがないと同時に，これには発展の理論が欠けているということです。御承知のように古典派の人々は生産力の理論を中心に考えました。どうやって生産力が増大するかということを考えました。しかしながら近代理論の中にそれが欠けてまいりました。価格の決定のメカニズムはよく説かれているけれども発展の論理がない。この点について岩田先生は，発展の論理を持つ構造理論へという，こういう構想を抱きました。私が先生のお宅に行って夜遅くまで話を聞いたときに，そのビジョンが私の胸を打っていたわけでありますけれども，残念ながらまだ内容は十分ではありませんでした。

そこで私は構造理論というものを自分なりに考えまして，これを研究テーマに選びたいと思いました。結局，ワーゲマンの構造理論というものを選びました。当時ワーゲマンの研究というのは余りございませんで，京都大学の小島昌太郎という教授が昭和7年にワーゲマンの翻訳をだしまして，ワーゲマンの主要な本は訳されておりました。私は，これをもとにしながら，ワーゲマンの研究を通して構造理論というものを考えようとしたのです。しかし岩田先生はワーゲマンを評価しておりませんでした。むしろそこには発展の論理がないということを盛んに言われました。さて，この昭和18年，私が最高学年に進む1月8日，この若き恩師は急逝されました。そして，なお残念なことは，先生の新しい構造理論のビジョンを打ち出した本，つまり『国際貿易論序説増補版』が刊行されて1ケ月もたたなかったことです。先生が亡くなりましたので研究会は当然四散しました。しばらくの間は岩田先生にかわりまして，先生の友人であった山本登当時の助教授が研究会の面倒を見てくれましたし，それから，私自身の指導は豊田四郎という助手があたられました。その後，私は恩師がいませんので転々として，いろんな先生の間を歩かざるを得なくなりました。永田清，金原賢之助先生などです。ほとんど国際経済学は独学になってしまいます。

いわばこういう意味で学生時代における岩田先生との出会いというものが，あるいはその亡くなったということが，今日までの私の道を選ばした大きな機縁になりました。そしてその残された影を私は一所懸命追ってきたのが，私の若かりし頃の研究者としての道であったと思います。しかし，そのときは私は別に学校に残って先生のあとを継ごうとかいうことは考えておりません。意識の底にあっただけでございまして，御承知のとおりに戦争中でございます。兵役を控え明日の命がわからないという状況のもとで，私はその道を選ぶことを断念しました。そして兵役に服しました。

二

終戦になりまして多くの人々が経験したことは，荒廃に帰した国土での窮乏した生活，飢餓への不安，精神的虚脱でした。私自身もしばらくは無為の日々を過ごしました。自分の方向を定める術もございません。何になるかということも考えることもできない状況でございました。ところがある日，私はこの三田の山を訪れました。いま皆さんがいらっしゃる場所は昔は講堂でしたが，それも全部焼けて，まさに焼け野原でございます。図書館の屋根は抜けております。残ったのは塾監局と第一校舎だけでした。そこへ訪れたときにふと私は，学問への郷愁というものを感じました。そして学問をするということによって明日への希望を燃やしたものでございます。ただ，私の才能が果たして岩田先生のように花開くであろうかどうか自信は全くございません。私はこの道を選ぶことを決意しながらも随分躊躇をいたしました。

当時はいまの大学院のように履修届けも何も要らない旧制大学院というのがあり，ただ先生の指

導を受ければよろしいということでございまして，もちろん入学試験もありません。そこで私は指導教授の許可を受けに行きました。これが亡くなった財政学の永田清教授でございます。しかし，私自身の研究というのは学生時代からプツッと切れているわけで，2年有余も軍隊にいたため全く本を読んでおりません。いわんや語学の力は猛烈に落ちております。従いまして洋書を手にしても読むのに大変苦労します。もちろん，海外からは本が入っておりません。わずかに海賊版というものが手に入る程度で——海賊版と申しても皆さんおわかりにならないかもしれませんが，正規に入った本ではなくて，秘かにガリ版刷りにして売っているわけです。これを海賊版と称しておりました。こういうものがちらほらある程度でございます。

そこで私は，この語学力の回復をまず図らなければ研究者の道をたどれないと思いまして，たまたま先生のお宅から借りたものが，ここにありますような，C. F. Bastable の1903年に出た『国際貿易論』という本であります。これを拝借しまして，まず逐条これを翻訳することにしました。辞書を引きながら大変苦労しました。このバステーブという人は，厳密にはJ. S. ミルの再述の程度のもので大したことではないんですけれども，理論史上では新古典学派との交流があり，古典学派の原理を擁護しようとした一人でありました。そういうことでは，まさに貿易論を勉強し直すには大変よい機会であったかと思います。昭和23年に三田学会雑誌に発表した『バステーブの国際貿易論』がこの成果であります。もちろん読んでいるうちに，「一体このバステーブを含めて，それぞれの学者がどんな位置付けにあるんだろうか」，これを知らなければならない筈です。与えられるのは岩田先生の『国際貿易論序説』しかありませんが，学説史といっても部分的にこういう学者はこういうことを言ったという羅列では意味がない。何かそういう筋がなければいけない。そこでこの学説史をもう1回自分の手で勉強し直して見ようじゃないか。それには一番いいのは，まずこの岩田先生の本の中に出ている文献を一つ一つ自分で当たってみることだと思いました。いわば原典講読みたいな形で，いろんな原書や翻訳書を集めまして読み直しました。まさにアダム・スミスの『国富論』や，リカードの『課税の原理』からの出発です。

ところが偶然に手にした本が，これが C. L. Wu という人の『国際価格理論のアウトライン』(1939) でした。これは重商主義から古典学派——近代理論に至る学説的展開でございました。これはうまい。この本はまさに私の求めているシナリオになると思いました。

こういうことを考えますと，私は皆さんに，人の出会いとともに，われわれのような道はふと見つけた本，ふと手にした本が大変意味を持つといいたいと思います。そしてそれを物すごく熟読いたしました。そこで私はこう考えた。まず恩師の『序説』の論理を使おう。それと Wu の『理論史』をミックスしよう。そうするとそこにシナリオができ上がる。それに私自身が直に当たった多くの文献を突っ込んでみよう。そうすると一つの本ができ上がるのではないだろうかと思いました。

たまたま戦後早くも昭和22年に『三田学会雑誌』が経済学会で復刊しておりました。そこで22年

に「リカードの国際貿易論」を書きました。それから翌年にバステーブを書きました。これが私の最初の論文でございます。

さて，こういうときに慶応義塾で助手の採用試験がございました。これは前に定年退職をしました宇治順一郎君だとか，あるいは多くの人が話されたかもしれませんが，戦後の慶応義塾はお金が全くありません。しかも全部焼け野原でございまして，人を雇うなんていうのは到底できない時代でした。したがって助手の採用試験といっても，実は行ってみたら全部副手でございました。副手というのは無給の助手ということでございます。面接試験を受けましたが，君は何を研究しているのかねと聞かれ，「実はバステーブルとかリカードを勉強しております，そして理論史を書きたいと思っております」，こう言いました。そうしたら，では採用しよう。但し俸給はないというわけであります。当時大変なインフレーションでございまして，物はどんどん上がる。しかも長男である私が無給でもって学校に奉職なんていうのはとんでもないことでございました。でも私は，それでも結構ですと言ったのは別に自信があって言ったわけじゃなくてやむを得なく言ったわけです。そうしたらば当時の老先生がそばで，いまどき珍しい人がいるねと言ったかと思います。そこで初めて私は大学教授への道を開くことになりました。これはこの生涯の始まりでございます。そして昭和24年に助教授になりました。

その5月，私の最初の著書『国際貿易論の基礎理論』が出版されました。当時は本の中身よりも紙代の方が価値があった。したがって本の値段を決めるのは，目方が重視されたようです。

私の本の値段も目方で付いたのではないかと思いますが，この理論を書くのに大変苦労をいたしまして，精も根も尽き果てて，出来上ったときは虚脱状態に近かったといえます。

私は『基礎理論』という題を付けましたけれども，基礎理論とは理論史であるというふうに考えていたからであります。

さて，助教授になりましたので三田で講義を持つことになりました。当時は数名助教授になった人が一斉に土曜日に開講させられ競争講座なんていう名前を付けていました。どこが評判がいいか，などと大変なものでございました。当時の教授連中というのは大変厳しかったなと私は思います。こうして私は講義をし始めましたが，ただ残念ながらまだ未熟で，きょうもＯＢの方が見えておりますが，私の研究会の1期から大体5期ぐらいの方々には大変御迷惑をかけました。私自身も若い。大体27歳の頃です。有名な比較生産費原理の説明でも「イギリスでは布を100人でつくる。ブドウ酒は120人でつくる。ポルトガルはそれぞれ90人でつくり80人でつくるとする。」こういうことを言って，この場合より優れた生産に特化し国際的に分業した方がいいんだといったのですが，これが私の最初の論文「リカードの国際貿易論」でミスプリントで数字が入れかわっているのを知らないものだから，貿易が行われなくなってしまったのです。しかしそれがどうして行われないのか全然わからない。それで30分間立ち往生いたしました。汗は流れる。それでしかも大見栄

を切りまして，「この例題では一見すると貿易が行われないように見えるかも知れないが，これから述べる原理によれば貿易が行われそこに利益が発生するんである」というふうにいい切ったんです。ところが貿易が行われない。当然利益が発生しない。こういうことでございます。約30分間立ち往生。そのためにいろいろと学生の方も考えてくれる。大変いいことで，学生も一緒に考えてくれたんですから随分勉強になったんではないだろうかと思いました。そういう時代でございました。

同時に，当時大変不思議なことのように思いますが，昭和24年なんていうのはまだまだ日本の貿易はノーマルではないんです。戦後の占領下にあります。貿易なんていうのは民間貿易再開しましたけれどもわずかでありまして，そして360円レートが始めて定められた年でございます。したがって貿易なんていうのは現実に存在しないに近いわけです。にもかかわらず貿易論を聞く。そして貿易論にはその中に現実問題が全く出てこない。リカードだとか，バステーブだとか，マーシャルだとか，いろんな学者が出てくるけれども，理論は遠い話だったんです。

ただ，私，思いました。現実の問題が存在しないから興味を持たないかというとそうではない。むしろ逆に現実が異常であればあるほど人間というものはそうでなくて，何か夢を求めていく。そしてその知識の集約したものを求めていくのではないかと私は思いました。そういうことで知識を満たそうというのがこの三田山上にいっぱいあふれていたと思います。明日への期待というものがそんなところにもあったのではないかと思います。

ただ，私の昭和24年のときにもう一つの仕事がありました。それは貿易政策の研究です。御承知のように戦後世界の再建には自由貿易が理念としてかかげられました。それは世界恐慌の教訓によるものであります。つまり第一次大戦後，保護関税が高まり世界恐慌からは一層激しく多くの国が保護障壁を設け，結局お互いにマーケットをクローズドしたために物が売れなくなって不況はますます深刻になる。そして物が売れなくなるからまた市場を閉ざそうとする。そういうふうになりますと，これが悪循環でブロック化，世界経済の分裂を導くことになったのであります。

そこで私は，こういうものの反省を含めて戦後の，つまり第一次大戦後の世界恐慌をはさんでの貿易政策の歴史を書き始めました。これが『貿易政策要論』であります。

ただ，ここで使用した文献にリープマンの「関税の水準の統計分析」があります。1938年に出た本で，それを見ますと欧州のいろんな関税のレベルが実に詳細に分析されております。これは大変よいデータです。私はこれを用いて欧州関税政策を書き，これにいろんな貿易の手段の分析を掲載してみました。これが『貿易政策要論』でございます。啓蒙書として書いたわけですが，政策効果分析は主として部分均衡論を使っております。ただ，残念ながら体系的ではないし，中途半端であったかと思います。

こういうことで過ごしているうちに，昭和25年に私は新しい方向への転換を図ることができました。これが昭和25年に書きました「国際貿易論の展望」(『理論経済学』3号) であります。これは内

外の国際経済学の動向というものを整理し，展望しようとしたものです。海外では近代経済学についてはエリスが「近代経済学の展望」を書きました。国際貿易論ではメッツラーが理論展望しているだけでございまして，日本にはございません。私はそこで1930年代以降の国際経済学の発展を論理的にたどりながら整理しようと思いました。これは私にとって大変な転機であります。それまでは岩田先生流のわく内で古典学派から1930年までが主でありました。これを契機に1930年以降の1950年代くらいまでの展望をすることになりました。その中にはケインズ経済学も入ります。一般均衡論も入ります。そして現実問題としてはドル不足という問題も入りました。こういうことで展望して，私は岩田先生のいままでの道から一歩抜けたと思います。

新しい系譜の中で私はテキストを書こうと思いました。ようやく講義にもなれてまいりましたし，いろんな肉付もできたのでテキスト的な試みとして『現代貿易新講』を出版しました。31歳のときであります。これにはつまり貿易論としてカバーすべきものとして，貿易為替の取引，国際収支や為替相場の理論，価格決定，国民所得と雇用。国内均衡と対外均衡というものをわかり易く解説してあります。今日の国際経済学入門みたいなものだと思います。この頃，実は1951年にJ.E.ミードが"The Balance of Payments"(国際収支論)を出しています。これはいい本で，物すごく面白かったといえます。御承知のようにケインズは不況は財政政策によってうまくいくと考えているわけです。国際的にも，デフレになったら始発国がこれを調整するような財政政策をやればうまくいくと思っている。ところが内外均衡という点からすれば，国際的にはそううまくはいかない。この二つの均衡が同時にうまくいく場合とうまくいかない場合とがある。それを何かの方法で補整しなければならない。これを理論的にケース別に書いたのがJ.E.ミードであります。私はこれについて，『三田学会雑誌』に「国際収支の所得分析・J.E.ミード」という論文を書いたのですが，その後も政策分析にこれを大いに活用しましたし，学会発表やいろんなところでも応用しました。私の博士論文になった「貿易政策の体系と展開」というのはこれをベースにしております。前にも書きましたが，ミードもそうですけども，考えてみると，人の歩みとか研究というものはひょっとした文献からのヒントが大きな転機になるんだということを感じました。

三

さて，昭和30年代に入ります。

昭和30年代というのは日本にとって復興が終わり，発展の道を歩むちょうどその始まりでございまして，神武景気のような好況をみつつ一方では国際環境の上で様々な問題に直面するようになりました。私の論文も大分そういう現実問題を扱うようになっています。

この昭和33年には面白い論争が巻き起こりました。それはどういうのかと申しますと，当時の一

橋大学小島清，篠原三代平両教授の間での論争であります。主題は戦前の日本の経済の発展に貿易がどんな役割りを果たしたかということについてでした。といいますのは，わが国の交易条件は長期的に不利化している。とすれば，これを経済発展との関連でどう説明するかです。篠原氏に言わせますと，それは低賃金による輸出ドライブである。その上に低分配率が加わり資本蓄積が強行されたからだというのです。これは戦前のマルクス経済学者の分析に似ております。ところがこれを巡りまして学会で討論がなされたんですけれども，マルクス経済学者の中には反対を唱えるものがいたりして非常に面白かったですが，小島清氏がコメントにたち交易条件が不利化したのは，明治，大正のときではなくて，1930年代になってからだから篠原説は妥当しないというのでした。そして日本の交易条件というものは低賃金とかいう国内的原因よりも対外的原因によるんだというのでした。

この論争は全くはなやかでした。これに私も参加しましたが，私は交易条件の変動を説明するのには日本の貿易構造の検討が必要だと主張し，改めて歴史的に調べ，為替相場がこれに強くかかわっていることを指摘しました。これについては時間の関係上説明を省略させていただきます。

しかし，私はこれを期に大変実証分析に興味を持ち始めたことは確かです。

これがレジメの3番目に出てまいります三つの論文でございます。「日本貿易構造の分析と交易条件」「日本貿易の計量分析」「わが国輸出構造高度化の位置，高度成長の達成」などがこれです。特にアメリカの総輸入の期間分析をやりまして，これと日本からの輸入との相関を求め，趨勢と変動を計量しようと思いました。御承知のように当時，日本は対米輸出に大きく依存しておりこれが伸びるか伸びないかが死活問題といってよかったからですが，私にはどうもそのままだと対米輸出の将来は輸出構造の高度化が進まなければかなり不安定のように思えてなりませんでした。私の米国側から分析した結果はこれを明らかにしたものです。続いて，「わが国輸出構造高度化の位置」という論文で工業諸国と日本の高度化の軌跡をあつかいました。統計的に重工業，化学工業，軽工業の三つの構成比を出し，これを三角図表であらわしました。これは私のオリジナリティでございます。そして時系列的にこれがどう各国の貿易構造が高度化したかという軌跡をこの図に表示しました。後にこのような三角図形表示化が通商白書に用いられています。

さて，このように昭和30年代の私は実証分析の世界にも入ってゆきましたが，ここで私の人生にとり決定的な影響を及ぼした事柄にふれておきたいと思います。ハーバード・ビジネススクールへの派遣でございます。昭和33年，私の36歳の頃でございます。突然6月に，当時の松本理事が自宅にみえまして，私にハーバード大学へ行けと言う。最初，これは素晴らしい話しだと思いました。ハーバード大学にゆけばキンドルバーガーに会えるかも知れない。G. ハーバラーもいる。自分の専門分野のことしか考えませんから，これは国際経済学の研究にまたとない機会がきたと考えたのです。ところが，話しはビジネススクールへ行きなさい，君は教授になったホヤホヤだから団長にな

れ，ということで5人のチームが編成されました。当時の法学部助教授の十時厳周君，それから高橋吉之助工学部助教授，村井俊夫経済学部助教授，笠原工学部助教授がこのチームのメンバーでした。しかし生活費は月150ドル，150ドルというのは当時でも大変な低レベルでございまして，向こうで平均賃金が大体300ドル。ニューヨークの日本の商社の人がもらうのが600ドルですから推して知るべしです。しかも国内から外貨の持ち出しは1,000ドルしかできません。

そういう厳しい条件の下で私はハーバードへ行くことになったのです。御承知の方があるかも知れませんがハーバードはチャールス川をへだてて，左側が本校ハーバード大学。川の向こうにビジネス・スクールがございます。このビジネス・スクールというのはケースメソードという教育の方法をやっておりまして，日本ではすでに慶応が提携してビジネス・スクールの先生に来てもらって高等経営講座を開いていましたが，それをひとつ向こうで体験して学んでこいということのようでした。

慶応のいいところ，悪いところいろいろありますが，どうも悪いところは，この場合に私達には一切そういう方針を与えないのです。つまり，何のために私ども行かせられたのかわからない。最後までそれがわからなくて終わるんですけれども。一所懸命になって塾長に手紙を書きました。一体私どもは何の使いなのか。何のために来ているのか。向こうでは慶応でビジネス・スクールをつくるんだと思っているらしいし，いつつくるんだと盛んにきく。わからないから早速塾長に，こう言われているがどうするんですかと問いあわせるのですが全然返事もくれない。一切おまえが考えろということだと思うんですが，現地にいる私達にとれば大変な苦労でした。いわんやケースメソードも経営学も私には初めてです。しかもケースですから実践的でございます。様々なケースでハンバーグステーキを売らせられたり，タクシーに無線を付けるかどうかとか，新製品のチューブを旧製品に対してどの位の値段をつけたらよいかとか，それはそれは実践そのものでした。私はこのようなマーケッティングや総合管理，経営史のクラスに出ましたが，いずれにしろ，討論が中心ですから，その準備は大変なものでした。

当時，私はかなり太っておりましたが，約1年間で物すごくやせてガリガリになってしまいました。そして何の因果でこんな苦労をしなければならないのかと，毎晩5人のグループが集まりまして涙が出ました。われわれは慶応義塾で悪いことをしたのか。にもかかわらずわれわれはこんな苦労をなぜさせられるのか。それでいて苦労した結果を慶応義塾が使おうというならわかるんです。ところが何だかわけがわからないというのが，現地でのわれわれの悩みでした。

しかし，ケースを通して経営戦略とか，管理能力というものを学び，企業の成長というものは二つの柱から成り立っていることを知りました。一つは，R&D，リサーチ・アンド・ディベロップメント。つまり技術開発。それからエデュケーション。教育であります。それらがアメリカの成長要因でもあったと思います。

それにしても，当時のアメリカの状況を見るにつれ，そこに大きな革新波動が起こりつつあると考えられました。実際，アメリカには戦後の新しい成長が起こりつつあったのです。しかし私はまだシュンペーターの革新波動の理論には到達しておりません。

それでは，アメリカでどんなことが起こっていたかと申しますと，第1に，新しい技術，新しい生産設備，新しい製品への投資がどんどんふえていました。

第2に，人口の増加です。統計的にはその5年間で年率にして8.5%の増加であります。これはベビーブームの時代をむかえたことを示します。そして御承知のように東部から太平洋岸に向かって新しい経済市場が拡大してゆく，いわゆるトランスファの時代でございました。私はそのアメリカの新しい波動の上昇期を眼にして，それが必ず日本に波及するだろうと確信して戻ってまいりました。帰ってから書いたのが，「高度成長の波動の行方」という，『慶応ビジネスフォーラム』の論文でございます。ここで長期波動についてすでに書いております。これはコンドラティークの長期波動。50年，60年サイクルを描く経験的な理論でございますが，海外ではこうだよ，日本はまだ復興から発展に入ったばかりだけれども，いずれはこうなるだろうということを申しました。そのためにはやはり経営教育も必要だとか，述べたのであります。

しかし私は日本への波及をこのように考えております。昭和30年代日本からたくさんの人が渡米しました。特に生産性本部は実業界から多くのチームを編成し米国に視察団を派遣しました。12人が一組でございました。しかも12人のメンバーは実に多様でした。学者が一人必ず入り，経営のトップ，技術関係者，労働組合幹部という具合です。チーム毎に業種も異にしておりました。昭和30年から7年間に何と368チーム，合計4,400人が生産性本部からアメリカにいっています。

当時は日本は戦争により長く海外と途絶しておりましたのでアメリカの事情は全くわからない。むしろアメリカの印象というのは世界恐慌しかない。資本主義の行き着く道は世界恐慌だという頭しか私どもにないし占領されて巨大な権力者といった暗いイメージしかなかったといえます。ところが皆向こうへ参りまして全く新しいアメリカに触れました。私を始め多数の人が視察にゆくことができ，直接に米国の事情を見てきました。顧りみますと明治のときもそうでしたが，日本は新しい外国の文化に接し，これを吸収するときは必ず向こうへ行って直接自分の眼で見てきています。福沢先生もそうです。しかもいろんな人がいろんな角度で見てきて日本に持ってきてこれが日本の近代化に寄与したのですが，戦後の場合でも同じでございます。多くの人が向こうへ行って見てきて，日本に持ち帰った学習効果は非常に大きかったといえます。私はこうしたやり方を日本型の革新吸収と思っております。

この私の考え方は昭和57年，オーストラリアの各大学でも講演しましたが，「テクノロジカル・イノベーション・アンド・マネージメント・プロブレム・オブ・ジャパン」として『慶応ビジネスレビュー』に載りました。それから，一昨年『三田商学研究』に，「日本における革新波動の吸収

とその史的分析」という論文で書いてあります。

さて，日本に戻りましてから，私の研究自身も大分変わってまいりました。一方では，相変わらず，「古典学派貿易政策の体系と展開」とか，「ジョン・スチュアート・ミルの経済発展と貿易政策原理」とかいうパターンの研究を発表していますが，他方で山城章氏の編集の『総合経営管理』に依頼され『企業環境の変化』，『弾力的経営戦略』を書き近代経営という雑誌に『戦略目標の立案や戦略マトリックスの展開』という論文を寄稿しました。これは全く経済学の範囲ではございませんので多くの方々は，白石がこのようなものを書くのかと驚かれることと思います。特にマトリックスというものの考え方は当時としては珍しかったのではないでしょうか。こうして，私は経済学を学びビジネススクールで実践的経営学を学んだわけですが，これからというものは教育についてミクロとマクロの接点で物を考える人材の教育が必要だと思うようになりました。私が商学部長にさして頂きました折も，学部の特色に「マクロとミクロの接点」ということをかかげたのもこれであります。しかし私の視野が拡大したものの，実は私自身がこれを契機にとんでもない世界に入らざるを得なかったように思うのです。学校行政がそれです。

四

昭和45年になりまして，私はもう一度海外へ留学のチャンスをつかみました。実はハーバードのビジネス・スクールへ行ったのは出張でありまして，留学ではありません。ところが塾ではこれは留学と記録されているため留学の番がとばされそうになりました。そこで「留学ではない。出張である」と大いに主張しました。そうしたら，留学をそれじゃさせてやろう。但し1年じゃなくて8ヶ月と値切られまして，8ヶ月の海外留学ということになったわけです。

たまたま昭和40年代というのは私の危機の時代でございまして，志木の高等学校の校長をやらせられたり，塾全体の常任理事として，人事・総務担当をさせられたりしました。これは大変な仕事でした。そのせいで私は3年間近く研究が完全にブランクになってしまいました。忙しくて何にも書けない。いらいらするばかりでした。

さて，そんなことがありましたせいか欲求不満が爆発したように，なけなしの貯金をはたきまして家族づれの留学の旅に出ました。

久し振りにハーバードへ行って，まず産銅会社の資料を集め始めました。産銅の歴史はまさにアメリカの開拓史であります。アナコンダ，ケネコット，フィリップ・ダッヂという三大産銅会社を中心に，その社史を夢中で読みました。ちょうど真冬でございまして，私はアパートから歯を食いしばって毎日図書館に通って資料を集めました。私は経営史の専門家ではございませんが，この研究は興味がつきませんでした。

帰りましてからその成果を『三田商学研究』に，「アメリカの産銅会社と資源開発」というテーマで連載しました。その中に先ほどのマトリックスが出てまいります。経営史をマトリックス的に展開しよう。したがって資料を時系列的なマトリックスにいたしまして，いつどういうふうな部署で何をやったか。財務はどうであったか。人事はどうであったか，開発はどんなことをしたかなどをその時の基本方針とあわせて表につくりあげました。いわば比較経営史の論文でもあったと思います。

ただ，そこで私は大変面白い経験をいたしました。御承知のように，最初の大きな産銅会社は世界第一のアナコンダですが，早くからロッキー山脈でいい銅を掘ってしまいカナダから進出したケネコットは品位の低い銅山しかなくこれを開発しなきゃいけない羽目に陥ったのですが，そこで考えたのがオープンピット方式であります。これがオープンピットの始まりでございます。ケネコットはそれで大変な経済性を挙げるわけです。

ここで私は思いますのに，資源が豊富であれば必ずしも技術は進歩しない。このように資源がなくなってきたケネコットがやむを得ずとった方がオープンピットという技術進歩であった。つまり資源豊富国よりも資源稀少国の方が技術進歩が進むという現実をこれから学ぶことができるのではないかと思います。

米国から更に南米ブラジルに参りました。そこで日本の進出企業を調査してまいりました。日本の進出企業の成功した例，進出して失敗した例を見ました。それが『ブラジルの経済発展と貿易政策』の論文にもなりましたが，その中でブラジルの輸入代替工業化政策にふれています。実はこれが開発戦略としてあまりうまくいかない。なぜかということでございます。このことについて私は，企業の論理と政府の論理のギャップというものを描こうとしました。

例えば，政府の論理は輸入を制限すれば国産化できる。国産化がすすめば国際収支も改善できる。しかも国産化により雇用も吸収できる。そしてそれが連関効果を持って工業化全般をもたらすだろうという考え方。これは政府の論理であります。

しかし企業からとりますと反対の結果となります。むしろ国産化企業が外注を増やすと，下請企業が悪いものですからコストが高くなる。しようがないからむしろ内製化率を高めるようになる。しかも部品は海外から買ってこざるを得ないからこの種の輸入が増える。雇用といったって定着率が悪いわけだから，余り雇用をふやさないで，機械化してしまおうというふうになってしまいます。こうして企業利益の論理を考えるならば政府と一致しないのは当然でございます。この辺の論理の問題を私はいろんな論文に書きました。「多国籍企業のコンフリックションの問題」という論文もその一つでございます。

そのうちに私はブラジルから帰りまして，ふと思ったことは，こういう研究の経験を踏まえ，いままでの革新波動と結び付けて何か一つの体系ができないだろうかということでした。これが私の

昭和51年の『経済革新と競争の世界』という本でございます。副題が「海外投資と経済発展」でございます。

しかし，そこでたまたま私の弟子の和気洋子君——当時はまだ助手でございましたけれども，いま商学部の助教授であります——がシュンペーターを勉強しており，私は「発展の理論」の指導をしておりました。和気君が一所懸命研究してくれまして，「革新波動」の理論付けをやる。私はここに前から持っていた革新波動のビジョンを生かしたいと思いまして，本の前半は私が対外投資の実証分析をやり，後半に和気君が書くということでこの本をあらわしました。ほとんど共著に近いものと言っていいと思います。ただ私はそこでこう考えました。

世の中は革新企業というものと旧企業とが存在する。そして常に革新をしようとする企業が生まれたときに，それを怠った企業は旧企業になる。そうすると旧企業は競争に負ける。そこでこの負けた旧企業が競争で勝てるのはどこかというと，こちらで旧企業と言われても新しい企業とみなされるであろう外国であります。そこで外国に進出しようとするだろう。これが，シュンペーターの理論から論理的に引き出される対外投資ではないかと思います。それこそ日本型の対外投資の説明ではないかと思います。

しかしアメリカ型はどう説明することができるかです。アメリカはＩＢＭのように革新企業が外へ出ていってしまっているからです。この説明をこのシュンペーターからどう考えるかですが，和気君との討論の中でなかなか私がつかめなかったことであります。だからたくさん問題が残されていますが，総じて私は革新波動というものをシュンペーター理論の中で考えるようになったことは確かです。この研究はまた和気君が続けて将来やってくれたらありがたいなと思います。

五

さて，私はその後，学部長になりましたが，そのときに商学部にとって大変なことがおこり，どんなに悩んだかわかりません。しかし商学部は立派に立ち直ったと私は思います。ただそれだけに苦労が多い日々でした。その故か私はこの反動で新しい課題にチャレンジしたくなりました。これが発展史へのビジョンでございます。

御承知と思いますが，この地図を持ってまいりました。これは大変変わった地図と思われるかも知れませんが，これが本当の世界地図でございます。先生方は御存じでございますが，日本が一番極東でございます。普通の高等学校，その他，あるいは普通に使っている地図は真ん中に日本があるものでございます。しかしそれだから国際的な感覚がずれるのではないかと思うのです。けれども実に不思議なことに，このような世界地図を使っている会社は少ない。どこにいっても社長室には日本が真ん中にある地図が飾ってあります。

さて，ここでなぜこのような地図を持ってきたかといいますと，これから私の申し上げるビジョンが出てくるからであります。つまり私は南米史の研究からこれまでの欧州経済史にチャレンジを試みたかったのです。いままでの欧州経済史はイギリス産業革命の成立を頂点にしたものであって，これに至る歴史的プロセスか資本主義の国際比較が主題であったかと思います。しかし，海外に参りますと，かなり違った感覚をそれぞれの国がもっていることがわかります。経済史観の違いみたいなものがあるのに気がつきますし，南米を研究すると，どうも違った国際経済発展史がでてくるような気がしたのです。例えばブラジルには砂糖が最初の栽培産業ですが，この砂糖はポルトガルの技術と，オランダの資本とマーケッティング力によって発展したものです。ところがスペインがポルトガルを吸収合併した時期に，危機を感じたオランダはブラジルの砂糖業を約20数年間占有してしまいます。そこで彼らは栽培技術を学んでしまいます。その後，オランダは自分の以前からもっていた資本力にマーケッティング力と，この学んだ技術によりカリブ海に進出いたしまして，そこで砂糖を経営するに至りました。これは非常な力を持ってきます。そのためにブラジルの砂糖は販路を失い売れなくなってしまいます。それと同時に，このカリブ海ではオランダ経営の砂糖を輸出のための船の注文が北アメリカの北東海岸地域にゆき，そこでの造船の発展に結び付きます。また砂糖を運ぶ箱が要ります。そうすると箱をつくるための木工産業が北東部で発展したのであります。このように国際的にそれからそれへと発展が波及していったといえます。つまり，イベリア，ブラジル，カリブ海。北米の発展関連史があるはずだ。これが欧州経済史から完全に離脱されている。これは何事ぞという問題でございます。

第2に，ブラジルでその後こうして砂糖がだめになり，綿花が栽培されます。これはイギリスの紡績の発展によるものでありましたが，これがブラジルで広範な地域で発展していった頃，今度はアメリカの南部で綿花栽培が発展し，この競争でブラジル綿花は急速に売れなくなってしまいました。こうして再びブラジルは発展産業を失うことになります。そこでコーヒー栽培にシフトしました。

ブラジルコーヒーが有名なのは御承知の通りです。ところが戦後アメリカがインスタントコーヒーを開発しまして，アフリカのコーヒーが大量に使用されるに至り，ブラジルのコーヒーは不況におち入ってしまいました。そういうようにブラジルの経済発展は非常に宿命的でございます。次から次へと基幹産業が発展するんですけれども，アメリカとヨーロッパの谷間に陥込んでしまうのです。私はこの観点から国際発展史を書いてみたいと思いましたが，更にもう少し広げて国際的な発展拠点というものを探っていこうと考えました。もちろんスペイン→オランダ→イギリス→アメリカへと世界の発展拠点は今日まで逆「の」の字型を描いているようです。

またその中で，イベリア半島，南米，カリブ海，北米を含む経済発展関係を明らかにしたいものだと思ったのです。これが特に欧州経済史の中でどうして取り入れていないのかが不思議でなりま

せん。

ただ，この研究を始めましたらどんどん泥沼に足を踏み入れてしまったようなものです。こうした考え方は正統な経済史観から見ると亜流でございます（少なくとも正統なのは従来の欧州経済史でありますから）。

最初は歴史はいずれにしろ一つの仮説にすぎないのだから，これにチャレンジし，新しい歴史を描こうと思いました。しかし，実際に研究に入ってみると時代は逆上る，地域は広がるというようにとめどもなく，まさに際限がありません。これは恐しい世界です。貿易論なんていうのは，40年しか歴史がないわけです。経済史なんていうのは何百年もの研究が集積されており，本の数だけでも大変なものです。結局こんな世界に研究の足をふみ入れて立往生しました。別に今日あきらめてはいませんが，私は非常な痛手をこうむりました。

しかし60歳近くになってこういうものを始めたのは遅かったかな，もっと若い時代に気が付いていれば，あるいはものになったか。こういう感をいま持つわけでございます。

そして昭和50年代に入りまして，私は眼を日本の戦後の貿易史に向けました。たまたま，日本貿易会で創立三十年史をつくることになり主査として福島義久，唐木国和，和気洋子の三君と共にまとめあげました。これは私にとり社史編纂という仕事をした初めての経験です。特にこれが一つの材料にもなりましたが，通商政策の戦後史の研究を続け『戦後日本通商政策史—経済発展三十年の軌跡—』を出版しました。まだまだいろんな文献がたくさん出てくると思いますし，私自身がそれでもってまだ十分とは思っておりません。しかし私自身が三田山上に立ってからの慶応義塾の今日までの背景が，私の『通商政策史三十年の足跡』そのものであるといってさしつかえありません。そして革新，波動，吸収へと日本がたどりましたように，実は私自身も杏林大学に参りまして新しい社会科学部づくりをさして頂いております。もう3年になります。私はそこで，私の本やシュンペーターではありませんが，革新企業としての実践をここでやってみようと意欲を燃やしています。ただ教育は心であるという点で私の姿勢は少しも変りません。私は別にこの定年退職により第二の人生なんて一向に考えているわけではございません。私の道は全く同じでございます。ただ，慶応義塾で育ち，慶応義塾で御厄介になった方々に最後に，私のいままでの歩みをこうやってお話しできたことを幸せだと思う。

考えてみると，シュンペーターの発想からハーバードに留学し波動を感じとって25年，和気君と理論を学んでから8年です。そして私がこれからやることは何かといいますと，最後の仕事は国際経済学説史をもう一度書きたいということです。これは貿易論で私が出発をした原点に戻ることです。これまでいろんなものを学びましたものを肉付けしながら新しい形での国際経済学説史を書きたい。これが私の総決算になるだろうと思っております。

私は40年を顧みまして，慶応義塾にいて大変幸せだったと思います。これから私は杏林大学で，

新しいところで新しい仕事をしながら，そして慶応義塾のいいものを取り入れながら若い竹を育てていきたいと思います。

私を本日まで育くんで下った教職員諸君，それから先輩の皆さん，それからゼミの卒業生諸君，そして最後に，これまで大変苦労をかけた家内に心から感謝をする次第であります。きょうは最終講義に列席して頂きましてありがとうございました。

(拍　手)